

# 平城京左京二条二坊十一坪の調査

## —第611次

### 1 はじめに

**調査の経緯** 本調査は、個人所有地の造成工事にともなう事前調査である。調査区は左京二条二坊十一坪の南北中軸線上に位置するとともに、東西中軸線のすぐ南側に、菰川のやや北側に位置する。

調査区の規模は南北18m、東西10mで（以下、「中央区」と呼ぶ。図195）、北西に南北1.5m、東西11.5mの細い張り出し部をもつ（以下、「北西区」と呼ぶ。図196）。調査面積は合計197.25㎡である。調査は2019年4月2日に開始し、6月5日に終了した。

**周辺の調査成果** 調査区は十一坪の南半に位置し（図194）、その南端は菰川の現河道によって旧状が大きく失われている。そのため、坪南半における調査は第581次調査があるのみで、調査範囲も限定的であり、十分な成果は得られていない。

いっぽう、北半については第279次、第282-16次、第289次、第563次調査において、奈良時代前半の掘立柱建物群を検出している。それらは正殿風の東西棟建物SB6950を中心として、南北棟建物SB6957とSB7330が脇殿として配置され、SB6950の背後にも東西棟建物SB6990・SB6694・SB11034が置かれるなど、官衙的な建物配置が確認されている（『紀要 2017』）。また、第279次や第533次調査では緑釉磚などの施釉製品が相当数出土しているなど、宅地とするには異質な性格をもつことが判明している。

### 2 基本層序

調査区の基本層序は、表土（約20cm）、耕作土（40～50cm）の下層に奈良時代の整地土である灰黄褐色土（5～10cm程度、標高60.75m付近）を確認し、その上面で礫敷等の遺構を検出した。その下層は、調査区の北半では黒褐色粘質土を主体とする土層（最大30cm程度）が展開し、南半に向けて薄くなっていく。この黒褐色粘質土は、第563次調査で確認された黒褐色砂質土に酷似することから、奈良時代の整地土と考えられる。また、調査区南半では地山である黄褐色砂質土を検出し、その上面において多数の遺構を検出した。

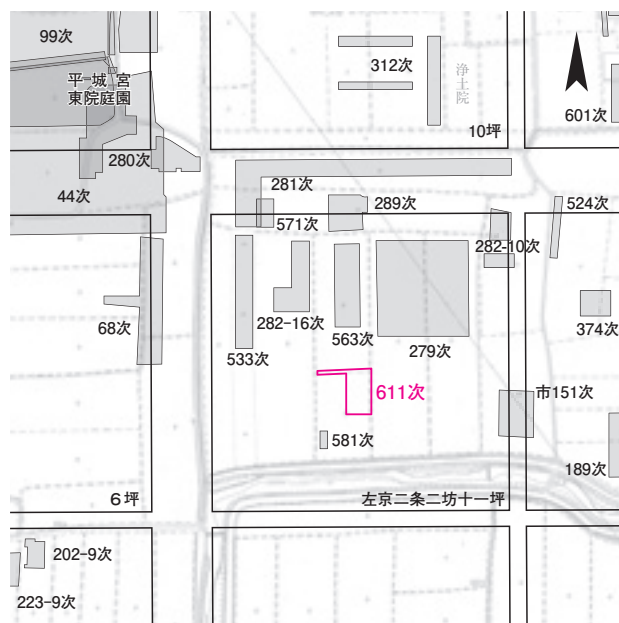


図194 第611次調査区位置図 1：3000

### 3 検出遺構

検出した主な遺構は、建物5棟、南北堀1条、東西溝4条、礫敷、集石状遺構である。これらは奈良時代の整地土である灰黄褐色土の上面で検出したものと、その下層である黒褐色粘質土および地山で検出したものの2群に分けられる。したがって、以下では灰黄褐色土を基準として「上層遺構」と「下層遺構」とに分けて詳述する。

#### ①上層遺構

**掘立柱建物SB11336** 中央区西北隅で検出した掘立柱建物。平面で柱穴4基、調査区北壁の断面で柱穴3基を確認した。南北・東西ともに2間分を確認し、柱間寸法は桁行・梁行ともに約1.8m（6尺）である。それらの配置から建物は北西方向に展開するものと想定され、今回は南北棟建物の東南隅を検出した可能性が高い。柱の掘方は平面の一边が約1mで、深さは約60～70cmである。いずれも柱は抜き取られているが、掘方底面に少量の平瓦を敷いているものもある。

なお、この建物は下層遺構であるSB11343を切り込むとともに、後述のSD11337をまたぐかたちで検出していることから、本調査区で確認した遺構の中では、もっとも新しい可能性がある。

**東西溝SD11337** 調査区北端に位置する東西溝で、北西区西端から中央区東端にいたる約21mにわたって検出した。幅は60～70cmで、ほぼ東西軸に沿って延びており、中央区東端で北に屈曲する。

溝の埋土は2層に分かれる（図198左上）。上層は深さ

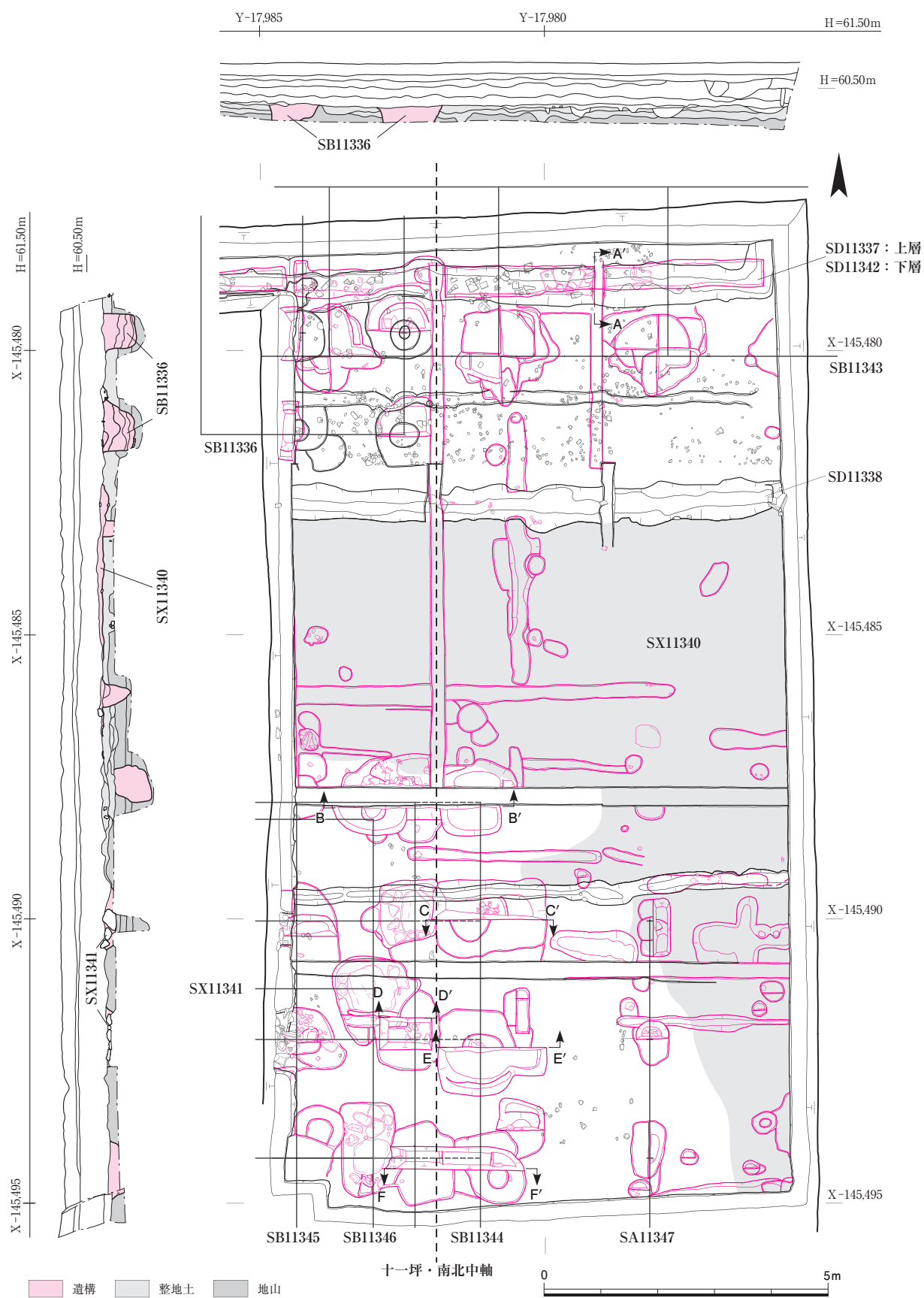


図195 第611次調査中央区遺構図、北壁・西壁土層図 1 : 100

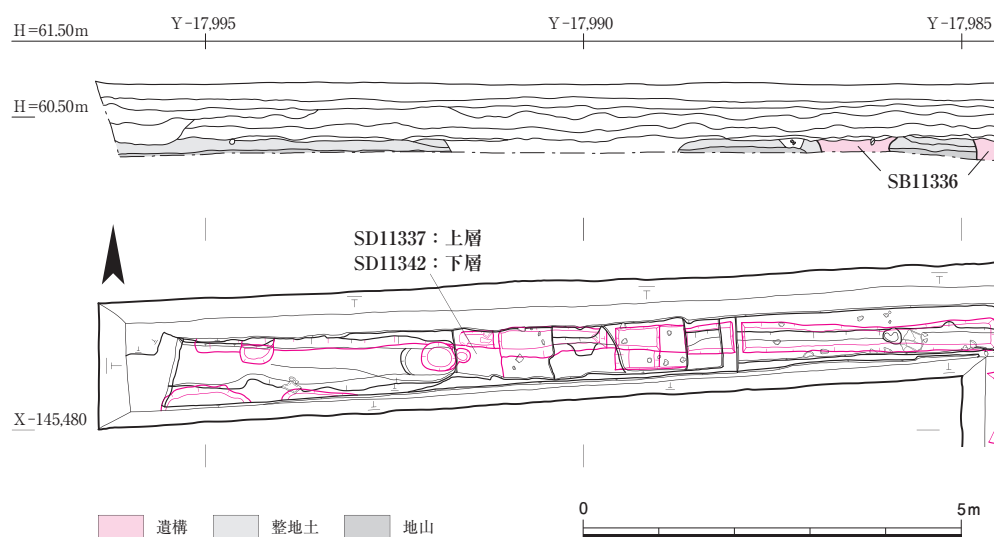


図196 第611次調査北西区遺構図・北壁土層図 1:100

15cmの黒褐色粘質土からなる埋土をもち、その底面に白色粘土を薄く敷いている。粘土は東端の屈曲部にもっとも遺存する。埋土からは瓦片が多数出土している。

いっぽう、下層は深さ20cm程度で、上層と酷似した黒褐色粘質土からなるが、溝際には硬質の砂質土層がある。また、埋土には瓦をほとんど含まないが、残存率の大きい土師器や須恵器が出土するなど、上層と下層とで状況を大きく異にしている。

この東西溝は勾配が極めて緩く、わずかに西に向かって低くなっていることと、東端屈曲部の上層底面が白色粘土で補強されていることから、北方からの水流を西側へ逃がすように機能していたと想定される。

**東西溝SD11338** 掘立柱建物SB11336の南方、後述の磔敷SX11340の北側に位置する東西溝。東西軸に沿って中央区を横断している。幅は60～70cmで、深さは約10cmと浅く、勾配はほとんど確認できない。しかしながら、埋土は灰黄褐色土からなるが、溝の西側に向かうにつれ、砂質土の割合が高くなることから、東西溝SD11337と同様、西へ流れていた可能性がある。

この東西溝の南岸は磔敷SX11340に接しており、溝よ

り北では磔敷が展開していないことから、磔敷SX11340の境界としても機能したと考えられる。

また、本調査で出土した熨斗瓦のほとんどがこの溝から出土しており、特徴的なあり方を示している。

**磔敷SX11340** 中央区中央部で検出した磔敷(図197)。東西溝SD11338の南岸を北端とし、そこから調査区南端まで展開している。ただし、調査区の東西全面にわたって展開しているのは南へ約5mの範囲までで、そこから南側では中央区東南部で残存しているのみで、西南部では磔敷下層の整地土や地山層が露出しており、磔敷の南辺は確認できていない。中央区西南部で磔敷が確認されないのは、後世の耕作等によって削平されたためと考えられる。

これらの磔敷は、径5～10cmのやや丸めの小礫からなり、黒褐色土からなる整地土上に敷かれている。場所によってやや粗密のばらつきがあり、大きめの礫ばかりが集中する箇所や、小礫を直線状に約3m並べているような箇所も確認できる。

この磔敷の隙間からは、小片となった瓦片や須恵器・土師器片がわずかに出土している。

**集石SX11341** 中央区の南半、西壁沿いの2ヵ所で確認した集石。いずれも径30～40cmの角礫からなり、北側では南北60cm、東西20cmの範囲に4石を、南側では南北1m、東西40cmの範囲で8石を確認した。一見、礎石下の根石のように見えるが、掘方ははっきりせず、地山直上に直接置かれている。

この集石に隣接してSB11345の柱拔取痕跡を確認しているが、その埋土最上層には集石を含むため、集石の時期はSB11345より新しいと考えられる。



図197 磔敷SX11340(西から)



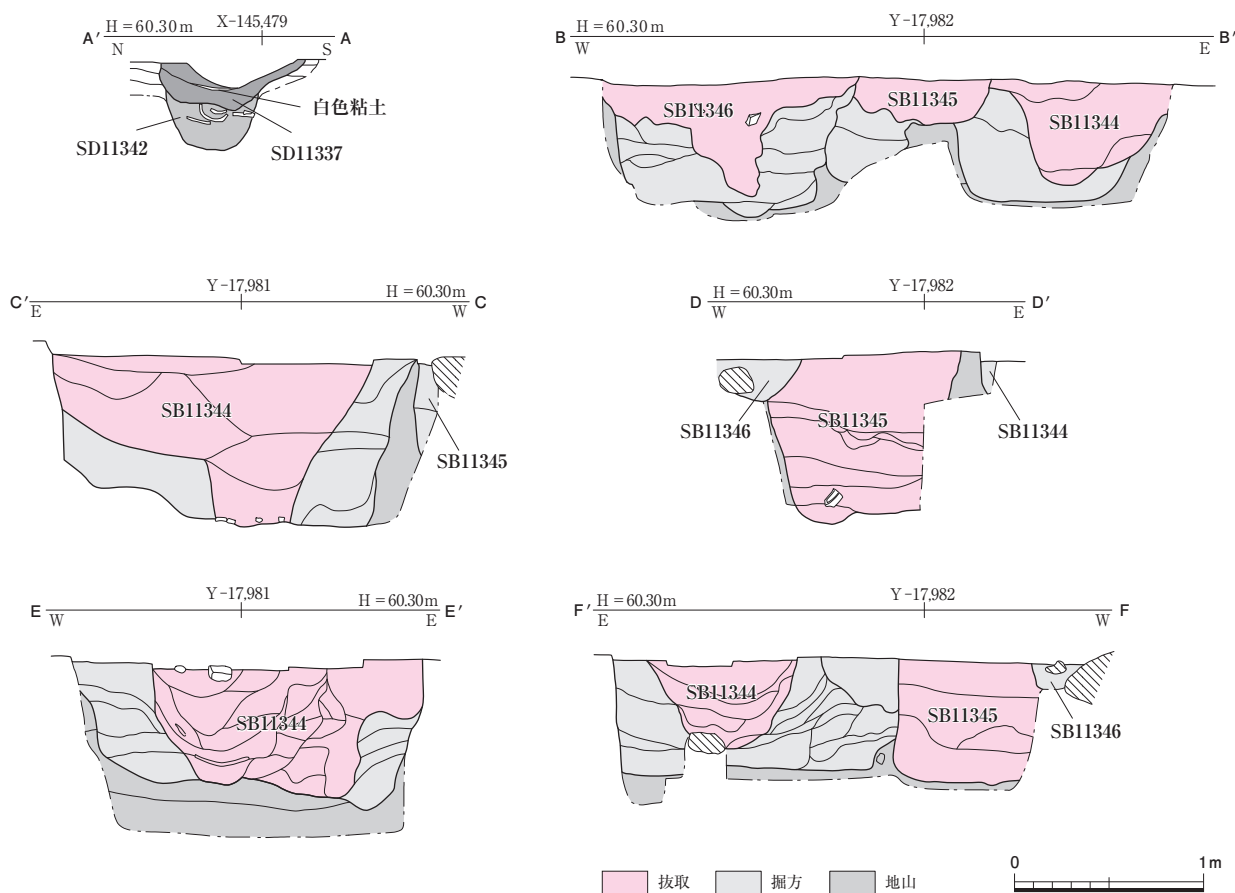


図198 第611次調査 遺構断面図 1 : 40

## ②下層遺構

**東西溝SD11342** SD11337のさらに下層で確認した東西溝。その位置はSD11337と完全に重複し、北西区から中央区までを東西に横断しているが、SD11337と異なる点として、中央区東端では北には屈曲せず、そのまま東へとまっすぐ延びている。幅は60～70cmで、検出面からの深さは約30cm、断面は逆台形状を呈する。中央区側の埋土からは軒瓦や平瓦がまともに出土しており、軒瓦は6272B-6644A・Cという長屋王邸所用瓦である。

**掘立柱建物SB11343** 中央区北部で検出した掘立柱建物。東西方向に並ぶ柱穴3基を検出した。柱間寸法は約3m（10尺）で、東西および北側はいずれも調査区外へと続くものと思われる。柱の掘方は一辺が約1mと大きく、いずれも抜取穴をもつ。

これらの柱穴は、第533次調査で確認したSB6990・6950と柱筋を揃えており、そこから類推すると、坪の南北中軸線上に位置する東西7間の東西棟建物で、その南面中央部を検出したこととなる。

**掘立柱建物SB11344** 中央区西南部で検出した建物群のうち、もっとも坪の南北中軸寄りに位置する掘立柱建

物。南北に並ぶ柱穴4基を確認しているが、これらと組み合う柱穴が西側ではっきりせず、調査区よりさらに西に位置している可能性が高い。柱穴は一辺が約1.4m、深さ約60cmと大型の掘方をもち、柱間寸法は約2.1m（7尺）である。北端の柱穴掘方のみがやや小さい（約1m）ことから、廂に相当する柱穴の可能性がある。柱穴の1



図199 下層遺構・中央区南半の状況（北から）



基からは、和同開珎が1点出土した。また、柱穴の一部は、後述するSB11345の柱穴に破壊されている。

**掘立柱建物SB11345** 中央区西南部の建物群のうち、SB11344の南北柱穴列のすぐ西側で検出した掘立柱建物。柱穴は全部で8基確認し、南北3間・東西1間分に相当するものと推定される。柱間寸法は桁行・梁行ともに約2.1m（7尺）で、柱の掘方は約1.2m、深さは70～80cmである。

これらの柱穴のうち、最大径約70cmの礎石と径20cm程度の角礫からなる根石をもつものが1基あり、その構造とSB11344および後述のSB11346との類似性から推定すると、身舎の東北隅にのみ礎石を用いて、かつ北面に廂をもつ東西棟建物である可能性が高い。

**礎石建物SB11346** 中央区西南部の建物群のうち、もっとも西寄りで検出した礎石建物。礎石は南北方向に並ぶ2基を検出しているが、その北側に同じ柱筋の掘立柱柱穴を1基確認しており、これも同じ建物を構成するものと判断した。礎石は径80～90cmで、その周辺には径20cm程度の角礫からなる根石も確認できる。据付穴は一边が約1.4mで、深さは20～30cmであり、据付穴の底に直接礎石を据え付けている。柱間寸法は北端の掘立柱柱穴を含めて約3m（10尺）である。

この北側の掘立柱建物はSB11344・11345と同じく、北面の廂に相当する柱穴と想定され、身舎が礎石建ちで、廂のみ掘立柱とする東西棟建物の可能性が高い。なお、この廂の柱穴抜取痕から軒平瓦6682C（=天平年間の所産）が出土した。

**南北塀SA11347** 中央区南半で、坪の南北中軸の東側に位置する掘立柱塀。柱穴3基、南北2間分を確認した。掘方は東西約60cm、南北0.8～1.2mであり、深さは約50～70cmである。柱間寸法は約2.1m（7尺）で、SB11344・11345の身舎部分と柱筋を同じくすることから、これらの掘立柱建物との関連性がうかがえる。

（林 正憲）

## 4 出土遺物

**土器** 整理箱にして7箱程度の土器・土製品が出土した。ほとんどが奈良時代の土師器、須恵器である。土師器に比べて須恵器、なかでも甕片が多く、陶硯や転用硯が目立つ特徴が指摘できる。ここでは、東西溝

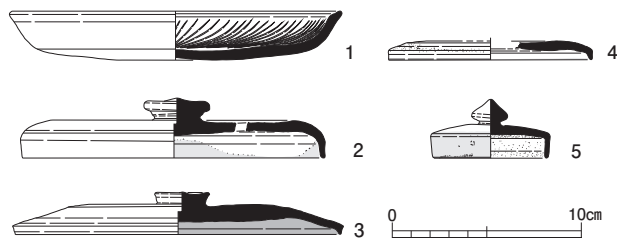


図200 第611次調査出土土器 1：4

SD11337の土器を中心に報告する（図200）。

1は土師器杯C。一段放射暗文を施す。2は須恵器壺蓋。頂部から口縁部の屈曲はなだらかで、頂部の1ヵ所に直径6～7mmの穿孔がある。内面に径13.3cmの重ね焼きの痕跡がある。3は須恵器杯B蓋。頂部外面は中程までケズリを施すが、端部までは及ばない。頂部外面には自然釉が付着する。内面は硯として使用した摩滅痕と墨痕が残る。1～3は東西溝SD11337出土。4は奈良時代の整地土から出土した須恵器杯B蓋の転用硯。5はSB11336の柱穴から出土した小型の須恵器壺蓋。このような小型の須恵器が出土することは珍しいが、この調査区からは杯Bや蓋など3点ほど出土している。このほか、釈読は難しいが墨書土器が3点、漆付着土器、製塩土器なども若干出土している。

（神野 恵）

**銭貨** SB11344の断ち割り調査で和同開珎1点が出土した（図201）。「和」の口の部分と「同」の字のみ残る。完存率は1/3。

（浦 蓉子）

**瓦磚類** 出土した瓦磚類の一覧を表26に示す。十一坪北半の既調査区の状況に比して、瓦磚類の出土量は決して多くない。しかしながら、特筆すべき点として6272-6644のセットが比較的まとまって出土していることが指摘できる（図202）。このセットは左京三条二坊一・二・七・八坪に所在した長屋王邸宅の所用瓦と推定されている。これらのセットのほとんどが下層遺構である東西溝SD11342から出土しており、遺構の年代を考える上で重要な手掛かりとなる。また、この6272-6644のセットは十一坪北半の既調査区でも散見されていることから、十一坪の諸施設の中には長屋王邸と関連をもつものがあつた可能性がある。

また、上層遺構である東西溝



図201 和同開珎 1：1

表26 第611次調査出土瓦磚類集計表

軒丸瓦			軒平瓦			その他	
型式	種	点数	型式	種	点数	種類	点数
6272	A	2	6644	A	10	熨斗瓦 面戸瓦	17
	B	1		C	2		4
	?	2		F	1		
6313	?	1	6666	A	2		
6314	Ca	1	6681	?	2		
巴(中世)		1	6682	C	1		
古代		1	型式不明 (奈良)		8		
型式不明 (奈良)		2	時代不明		3		
軒丸瓦計		11	軒平瓦計		29	その他計	21

	丸瓦	平瓦	磚	凝灰岩	レンガ
重量	55.645kg	183.812kg	0.479kg	0	0
点数	719	2623	2	0	0



図202 第611次調査出土軒瓦 1:4

SD11338からは、熨斗瓦16点がまとまって出土しており、周辺建物の屋根景観を考える上で興味深い。なお、十一坪の北半では緑釉製品が多数出土しているが、今回の調査区では確認されていない。(林)

## 5 まとめ

### ①遺構の変遷について

今回の調査で検出した遺構の変遷過程は、調査区の北半と南半とで状況を大きく異にすることから、まずはそれぞれの状況を整理することにした。

**北半の様相** ①下層遺構として、黒褐色整地土を掘り込んで大型の東西棟建物SB11343が坪の南北中軸線をまたいで配置される。②SB11343の廃絶後に、SB11343の南辺の位置に東西溝SD11342が設けられる。③灰黄褐色粘質土による整地がおこなわれ、上層遺構が展開する。

すなわち、SD11342と同位置に東西溝SD11337が開削され、それと同時に東西溝SD11338と礫敷SX11340が設けられた。④SD11337の埋没後、掘立柱建物SB11336が建てられた。

**南半の様相** 南半の建物はすべて礫敷SX11340以前に属し、柱穴の重複関係から以下のような変遷が想定できる。①掘立柱建物SB11344が建てられる。②次に、身舎の隅柱にのみ礎石を用いる掘立柱建物SB11345が、やや位置を西にずらして建てられる。なお、南北塀SA11347はSB11344かSB11345のいずれかと併存すると考える。③礎石建物SB11346がさらに位置を西にずらして建てられる。④整地の後、礫敷SX11340が敷設される。

**遺構の時期** これらの遺構の時期について、最たる手掛かりとなるのがSB11346の柱穴抜取穴から出土した6682Cである。この瓦は天平年間の所産と考えられていることから、SB11346の廃絶は天平年間以降のことである。下層遺構であるSB11346の廃絶後に上層遺構の礫敷SX11340が敷設されることから判断すると、下層遺構は概ね天平年間以前に属するものであり、上層遺構はそれ以降と判断することができよう。

### ②まとめ

今回の調査区にあたる左京二条二坊十一坪は、これまでの調査成果によると、坪の北半において、奈良時代前半に坪の南北中軸線上に正殿と後殿と想定される大型の東西棟建物2棟が建ち、その東西に脇殿とみられる南北棟建物2棟が配されるなど、極めて整然とした官衙的な建物配置がなされていたことが判明している。

今回確認した建物群は、すべて部分的な検出にとどまるものの、中央区北半で確認したSB11343は坪北半の正殿・脇殿と柱筋を揃えていることから、何らかの関連が考えられる。また、中央区南半の建物群については、奈良時代前半の間に同構造の建物＝北面廂をもつ東西棟建物が、ほぼ同一の場所で2回も建て替えられていることから、この坪が当該時期に何らかの意図をもって積極的に利用されていたことがうかがえる。

また下層の東西溝SD11342をはじめとして、この十一坪からは長屋王邸所用軒瓦が一定量出土していることから、十一坪そのものの性格を考える上で、長屋王との関連を視野に入れて、今後検討する必要がある。(林)